

令和2年 年頭のあいさつ

関西医療大学 学長 吉田 宗平

皆さん、明けましておめでとう御座います。

今年、2020年の干支は“ネズミ(子の年)”で、牛、虎・・・と続く十二支の始まりといわれます。私は、終戦後まもない昭和23年(1948)に生まれた**ネズミ年の団塊の世代**です。ご存知のように団塊の世代というのは、**昭和22~24年(1947~1948)**にかけて生まれ、第1次ベビーブームを形成して最高時の出生数は1949年の**269万7千人**と言われます。第2次ベビーブームの1970代前半以降は減少が続き、2016年からは100万人を下回って、今年の出生数は86万4千人と推計されています。我々の団塊の世代の**約1/3**にまで激減しています。その意味では、私たちの世代は、**人口の津波**のような世代で、青春期は受験戦争から大学紛争へ、更に高度経済成長期を生き抜いて、最後は少子化の中で増大する後期高齢者の集団へと移りつつあり、医療制度・社会保障制度を揺るがす世代となっています。

さて、私は古希後1年が過ぎ、今の20歳前後の若い学生たちには、もう**半世紀**も違います。古い話ですが、私の青春時代は、高度経済成長期の中で**高学歴を目指す厳しい受験戦争の時代**でした。そんな中で一年浪人をし、京都の南禅寺の近くで一人下宿生活をしていました。近くには「哲学の道」があり、疎水を辿りながら憂さ晴らしに南禅寺から永観堂を経て銀閣寺までよく徘徊しました。当時、まだ京都市内にはチンチン電車が走っており、銭湯もあってよく疲れを癒しに行きました。今は、そうした風情も無くなって残念に思いますが・・・。

私の記憶としてははっきりしませんが、近くの大豊神社(おおとよじんじゃ)のことが、正月の新聞記事に載っていました。**宇多天皇の病氣平癒**を祈願して**887年**に創設されたものです。その境内には「**大国社**」があり、狛犬でならぬ“**狛ネズミ**”が飾られています。その由来は、「**大国主命(おおくにぬしのみこと)**が野原で火に囲まれ窮地に陥ったところを、ネズミが地下の空洞へと案内して助けた」と古事記に語られています。まさに**救世主**だったということです。「**右側のネズミ**」は巻物を抱えて**学問**をあらわし、「**左側のネズミ**」は**万物の源**である**水玉**を抱え、**長寿**や**子宝**を象徴しています。これから生まれる**新たな“狛ネズミ”**の世代には、これからの**日本の救世主**となって欲しいと願っています。

中教審は将来のこの世代に対して、将来の教育の在り方を見据えて「2040年に向けた高等教育のグランドデザイン」答申を発表しました。少子化により18歳人口が現在の8割を切る時代に、日本の高等教育機関のあるべき姿を模索し、大学が如何なる使命を持つべきか問いかけました。私たちが所属する日本私立大学協会においても「私立大学版ガバナンス・コード」が公表され、私立大学においては、独自の建学の精神と理念を掲げて、自律性と創意工夫のもと教学や経営におけるマネジメント力をつけて行くことが求められています。昨年私立学校法が改正され、本年4月1日に施行されます。本学もそれまでに独自にガバナンス・コードを作成し、「建学の精神」や「クレド」に掲げた理念を実現に取り組むことが急務となっています。到来する「AI革命」、グローバル化と少子超高齢社会へと突入する激動する時代の中で大学運営や経営に教職協働した力を結集し、大学を挙げて難関に取り組まなければなりません。これまで日本の私立大学は、高等教育の8割を担い、社会に有意な人材を育成してきました。国の力となる分厚い中堅層を育成してきたと言えます。本学においても、保健医療分野でのリーダーや中堅層となる人材を育成するという重要な役目を果たしてきました。

これからの時代は、楽観的には第4次産業革命やSociety5.0といわれAI、IoTやICTを駆使した新たな「知の時代」到来が想定されています。しかし一方では、急速に進展する少子高齢化に加えて、「AI革命」の嵐による予想を超える失業が発生することも懸念されています。ロンドン・ビジネススクール教授のリンダ・グラットンとアンドリュー・スコットの著書「LIFE SHIFT 人生100年戦略」で述べられているように、一つの専門的能力や技術で、生涯、仕事を続け「一生、飯が食える」と考えられた時代は既に過ぎ去りました。「教育→就職→退職」と言う3ステージ人生から4~5段階の多ステージ人生への変換を余儀なくされ、多様な能力が必要となると言われています。団塊の世代の私たちが受験戦争で目指してきた3ステージ人生の知識偏重した高学歴社会はすでに崩壊しつつあります。

昨年の中教審による調査では、60歳を過ぎても「働きたい」と考えている人が、全体の81.8%、更に65歳を過ぎても「働きたい」と考えている人が50.4%と過半数を占めたとされます。また、高齢労働者の増加とともに労働災害発生率は、25~29歳代と比べると、65~69歳代では男性は2倍、女性は4.9倍高くなるとされます。2018年の平均寿命は、男性が約81歳、女性が約87歳です。しかし、健康寿命は、男性約72歳、女性約75歳で、平均寿命とは、男性で約9年、女性で約12年の差があります。この中で、高齢化に伴い非感染性慢性疾患や労働災害等がさらに増加しつつあり、その予防の上からも、生涯に亘るト

一タル・ヘルスケアの観点に乗っ取った身体的機能の向上のための健康づくりが必須となっています。その意味で、私たちの保健医療系総合大学としての役割が一層重大となっています。今後、人生100年時代を見据えた社会的共通資本としての教育や医療の在り方が問われています。

現代の産業や経済の形は、工業化に邁進した時代の資本集約による成長モデルから、知識集約型という新しい形へと凄まじいスピードで変化しつつあります。このパラダイムシフトに対して、受け身ではなく、能動的に関わるべきとされます。大学の機能は、知を創造しそれを担う人材を育成することに留まりません。多様な人々が集まり行動する協働の場でもあります。大学教育には「知識を与える教育」から社会の多様化にこたえ「知識を知恵に変える教育」、「自ら考え行動する教育」に転換することが求められています。すなわち、高学歴社会にあった「知識の修得力」よりもこれからは「知恵の体得力と伝承力」を身につけること、そして、そのコアとなる「人間関係力」を修得することが、これからの「AI革命」の中を勝ち抜いて生きて行くための必須条件となります。一方では、すべての人に開かれた教育機会の確保、何歳になっても学び直しができるリカレント教育、これらの課題に対応した高等教育改革を通じて、社会に貢献できる多様なポテンシャルをもった人材の育成が求められています。

最後に、現在の大学教育改革は、明治以来の大改革と言われます。幕末の志士に多大な影響を与えた大儒学者佐藤一斎は、彼の著書『言志四録』の中で、「少にして学べば、則ち壮にして為すこと有り。壮にして学べば、則ち老いて衰えず。老いて学べば、則ち死して朽ちず。」と生涯を通して真摯に継続して勉学することの重要性を語っております。また、「一燈を提げて暗夜を行く。暗夜を憂うること勿れ。只一燈を頼め」と明治維新へと続く黎明の闇の中で自らの志、理念を燈火として高く掲げて進むことの意義を語っています。

厳しい現代社会の暗闇の中で新たな一燈を見つけ出せる年となりますように願っております。狛ネズミの年男として、少しでもお役に立てればと願っています。

改めて、明けましておめでとう御座います。

どうか本年もご協力の程、宜しくお願い申し上げます。